

最古の須恵器型式設定の手続き

植野浩 三二

はじめに

日本における最古の須恵器型式は、一九六〇年代以降の陶邑古窯址群の調査・研究を基に、TK七三号窯跡等の遺物の一群をもってTK七三型式と命名された¹⁾。この判断は、現段階においても大きな変化はなく、最古の一群を示す指標になっている。しかし、一九八六年に始まった大庭寺遺跡の調査において、これまで認識されていたTK七三号窯跡には含まれない多くの遺物が出土し、TK七三型式の再検討と再編成が必要になってきた²⁾。

小稿ではこうした中において、初出段階の須恵器の相対的な位置付けの確認が必要と考えるため、最古型式の認定とその考え方を整理して、初期須恵器研究の一助とすることを目的とする。

最古段階の須恵器の解釈としては、TK七三号窯跡の前に大庭寺遺跡のTG二二二一・二二三二号窯跡が存在し、その後TK七三号窯跡が成

立したとする考え方が優勢であるが³⁾、一方では両者をほぼ同時期として、内容の違いを朝鮮半島での系譜の違いとして認識する二者がある⁴⁾。また、TK七三・TK八五・TK八七号窯跡や一須賀二号窯跡の相対的な年代の一部についても意見が分かれており、具体的な変遷の解釈が示されていないのが現状である⁵⁾。これは、遺物の解釈論である型式学的な理解とともに、最終的には消費地の遺跡での出土状況や分析を通して裏付けられるものであるが、これまでの先学の研究成果と型式学的方法を基に、まず具体的な方向性を示すことが重要である。

幸いにも近年、大庭寺遺跡の出土遺物とTK七三号窯跡の資料を埋める遺跡として、ON二二二一号窯跡が調査され報告書が刊行された⁶⁾。次章で紹介するように、TK七三号窯跡の成立と変遷を理解する上で非常に好資料である。初出段階からその後の須恵器の変化を合理的かつ具体的に把握できる内容をもち、前述の問題を解決する糸口もっているため、小稿では中心的にとり上げていくことにする。また、大庭寺遺跡の資料に関しては、その一部が公表されているものの、窯跡

の灰原資料は現在整理中であるため、引用するものは灰原以外の出土の必要なものに留める。

一、ON二二一号窯跡の概要と特徴

ON二二一号窯跡は大阪府堺市菱木に所在する。広義には野々井西遺跡と呼称され、同遺跡内に存在する窯跡を指す。遺跡は石津川の支流である和田川左岸に面する丘陵上にあり、窯跡は東側斜面にある。

調査区では窯跡の灰原のみ確認しており、窯体は調査区外にあると考えられている。灰原は二五〇三メートルの範囲に互り確認されており、その中から多量の須恵器が出土した。詳細は報告書に譲るが、以下その概要と特徴を記そう(第一〇三図)。

確認された須恵器は、蓋杯・高杯・把手付碗・鉢・甌・甗・樽形甌・器台・脚付有蓋壺・直口壺・甕・その他である。その中で、甕の割合が最も多く、全体の九五%以上を占めるといい、その他のものは五%にも満たないという。

蓋は、大型と小型がある(一〇三)。つまみを付けて天井部に文様を施すものが約六割あり、形態はやや天井部をふくらませて突出気味にするものもあるが、全体的には扁平に近いものが多い。稜部は、外方に太く突出させるものは少なく、短めにして丸く納める。天井部の文様は、刺突文と凹線を巡らすものが一般的で、その他に櫛描直線文

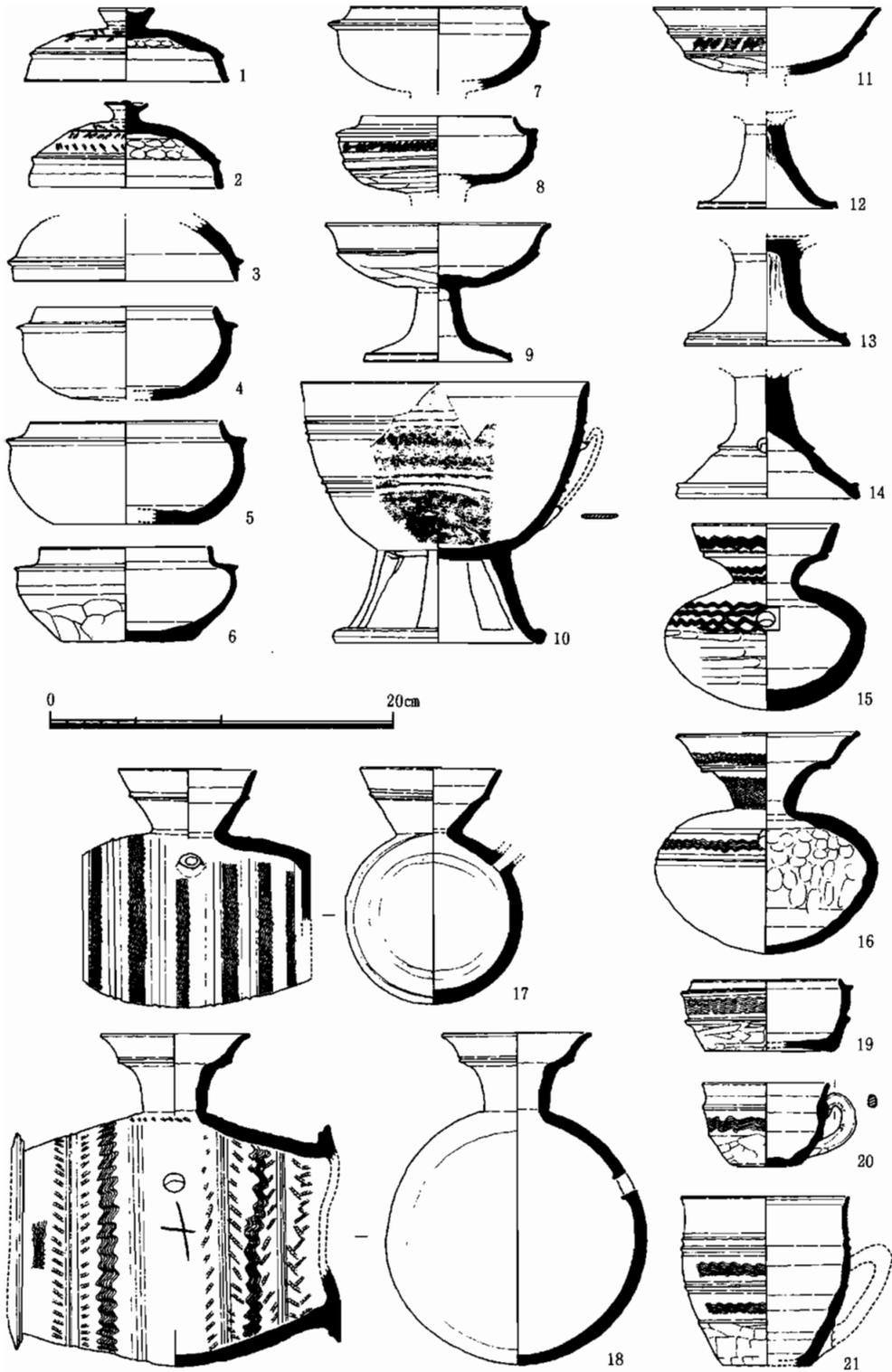
やカキ目・波状文を巡らすものも若干ある。内外面の成形は、横ナデが中心であるが、文様を施さないものには天井部に不定方向の筒削りをするものがあり、一部内面を削るものもある。

蓋の形態は前段階の変化として理解できるが、文様の有無はこれを補強する内容といえる。有文・無文の比率が六対四の割合であり、有文から無文への変化の過程が良好に窺える資料と考える。

杯は量的に少ない(四〇六)。深めで丸みをもつ体部に短く内傾する立ち上がりをもつ。受け部の張り出しは短く厚めであるが、平坦面を強く作り出すのは、特徴的である。六は、受部の面が内側に長く延び、その上に立ち上りを付ける。外面は不定方向の筒削りを施す。

杯の量はさほど多くないが、TK七三号窯跡に類似する杯が存在することは重要であろう。それは、前段階と予想している大庭寺遺跡の最古段階において杯がほとんどなく、この段階以降、杯の増加を認めるようになることから、杯生産の起点になるといえる。また、杯の形態が七の高杯と類似することから、杯の成立が高杯の杯部から生まれたと推定できる。

高杯には有蓋と無蓋がある(七〇一四)。七・八は無蓋高杯である。形態的には四〇六の杯に似る。八は、体部外面に波状文・凹線文を巡らし、底部には不定方向の筒削りを施す。九・一〇・一一は無蓋高杯である。九の杯部は、体部に突帯を巡らして屈曲部を作り、当窯跡において一般的な形態である。一〇は深めの杯部をもち、外面に二条



第1図 ON231号窯跡の須恵器1 (註6文献より)

二帯の突帯を巡らせて文様帯を作り、その中に波状文を配している。脚部は直立し、四方の大きめの方形透しを設ける。高杯の脚部には大きく二種類ある。土師器的な形態をもつものは別にして、脚部に文様がなく端部のみ突帯を付けるものと、脚部中段に突帯を付けるものがある。中段には円形の透かしを穿孔するものもある。

甕には通有のもの他に樽形甕がある(一七・一八)。「俵」形の体部を有する。穿孔部には、円柱形の注口部を取り付けるものがあり、注口部のみ数点確認されている。直口壺は口径の形態に二種類ある。口頸部を短くして二条の突帯を有するものと(二二)、二条の突帯を有するものである(二三)。

杯と同様に樽形甕は、大庭寺遺跡の最古段階では存在しない器形であり、それが当窯においては存在し、さらに以降の段階で顕著になることから、当窯は重要な起点になる。また注口部を作りつけた樽形甕は、かつてTK八七号窯跡で出土していた注口形須恵器(五八)の系譜としてたどれる。

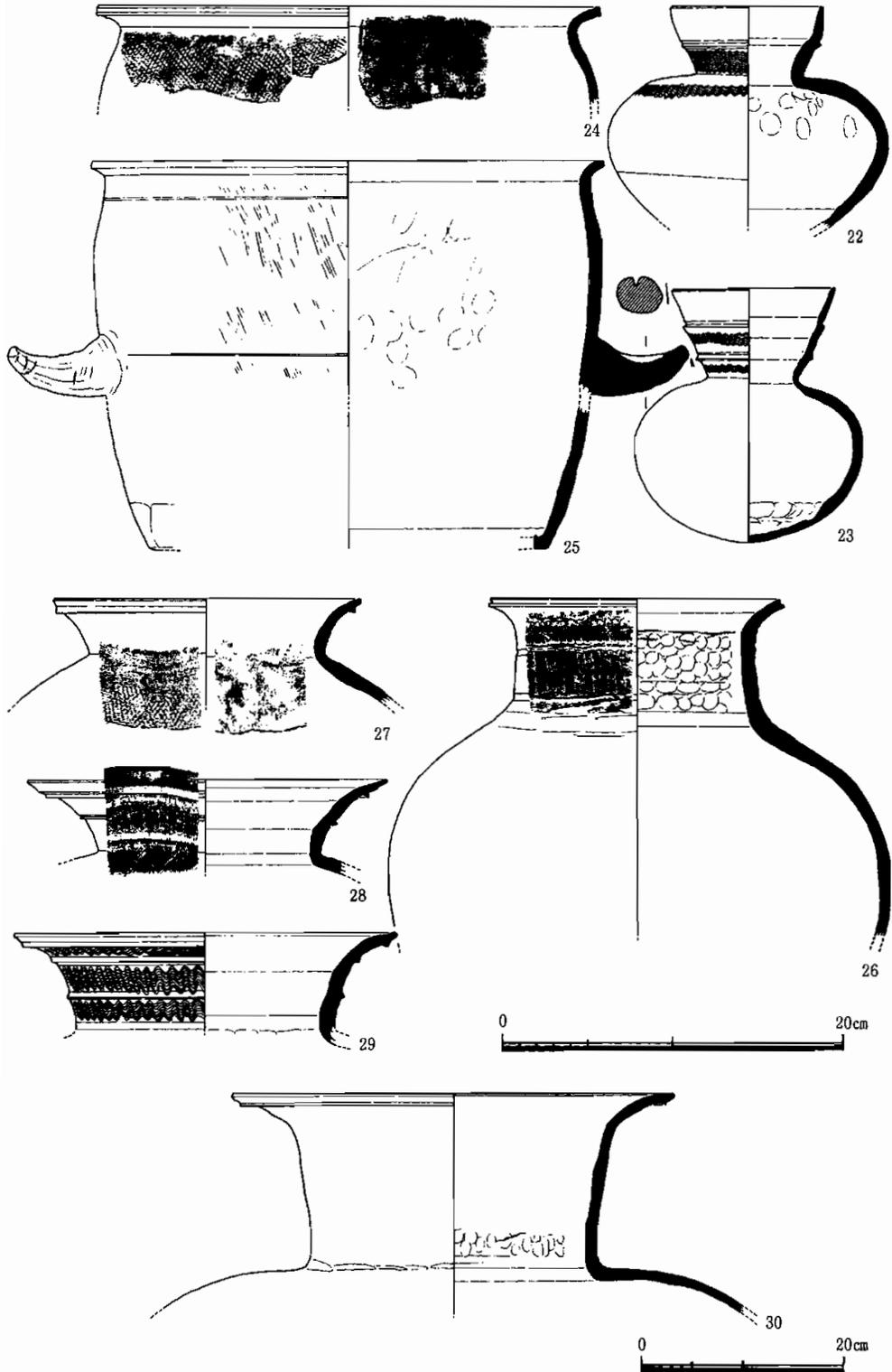
甕には大型・中型・小型の三種類ある。大型の甕は概して無文のものが多く、大庭寺遺跡の流れの中で理解でき、かつ次の段階では希薄になる点は重要である。口縁端部の直下に一条の突帯を有し、口頸部の内外面にナデの跡が顕著に残るものがほとんどである。中型の甕には文様を施すものがあり、一条または二条の突帯によって文様帯を作り、その中に波状文を施す。甕の外面に残る叩き目文には、平行・格

子・斜格子の三種があり、それぞれ粗密がある。その中で平行叩き目文は四三・五%、格子・斜格子叩き目文は五六・五%となり、縄蓆文は確認されていない。

脚付有蓋壺は数点出土している。三一は頸部に突帯と二条の波状文を配し、体部には凹線で区画した中に組紐文を巡らす。組紐文は「S」字形に反復させたものであるが、細部の仕上げが稚拙かつ雑である。その下方にはカキ目と縦方向の楕円文(集線文)を配する。脚部は「ハ」の字形に直線的に延びるもので、その中に突帯を三帯配して各三条の波状文を描き、長方形の透しを千鳥に配している。脚端は面をもたせている。

器台には筒形と高杯形器台がある。高杯形器台には、杯部の口縁部が直立気味に延びるものと、外方に開く二者がある。三四には波状文を二重に巡らせ、組紐文を連想させる構図をとる。最下段には幅の大きい波状文を描く。三三は五本の突帯を設け、その中に小刻みな波状文を配して装飾性を高めている。

こうした器台・壺に施された文様のあり方は示唆的である。三一の脚付有蓋壺には、肩部に組紐文がめぐっていた。「S」字形の反復によるやや雑な単純なものであるが、当窯では例が少ない。組紐文は大庭寺遺跡の最古段階ではかなり存在するが、その後は稀少になる。それが三一の脚付有蓋壺には存在する。組紐文の変形型としては、三四の器台に施された波状文をあげることができる。波状文を一周させて、



第2図 ON231号窯跡の須恵器2 (註6文献より)

山と谷が交互にくるよう配置した文様であり、明らかに組紐文を意識した意匠である。こうした例が数例存在し、組紐文の退化の確認によって、当窯の時期的位置付けを可能にしている。

その他に、図示はしていないが、前後の時期に存在する異形土器も少量あり、大庭寺遺跡から続いて認められ、次の段階にも継続する土器、逆に断絶して現れない土器があり、取捨選択された器形の検討を行う上で重要な位置を占めるといえよう。

二、TK七三型式の新古

TK七三型式は、TK七三号窯跡の遺物の一群をもって代表している訳であるから、単にTK七三号窯跡の遺物だけに限定するものではない。したがって、TK七三型式には、これまで述べられているように、TK八五・TK八七号窯跡や上代窯跡・濁池窯跡、および小稿で中心的に紹介しているON二二一号窯跡等の遺物も含まれていることをまず念頭におかなければならない。

TK七三型式は、特に初出期の須恵器であることから、多様な要素を含んでいることは承知の事実である。その要素が大きいため、後述するように、TK七三型式と一須賀窯跡・吹田三三二号窯跡・大庭寺遺跡の須恵器を系譜の差として同時期操業とする見解が生まれている。筆者は、それを前後関係として考えるため、その方向性を導くために

は、おのずとしてTK七三型式の中での変化の解釈と、後の時代の須恵器を含んだ変化・変遷の整理をしておく必要がある。

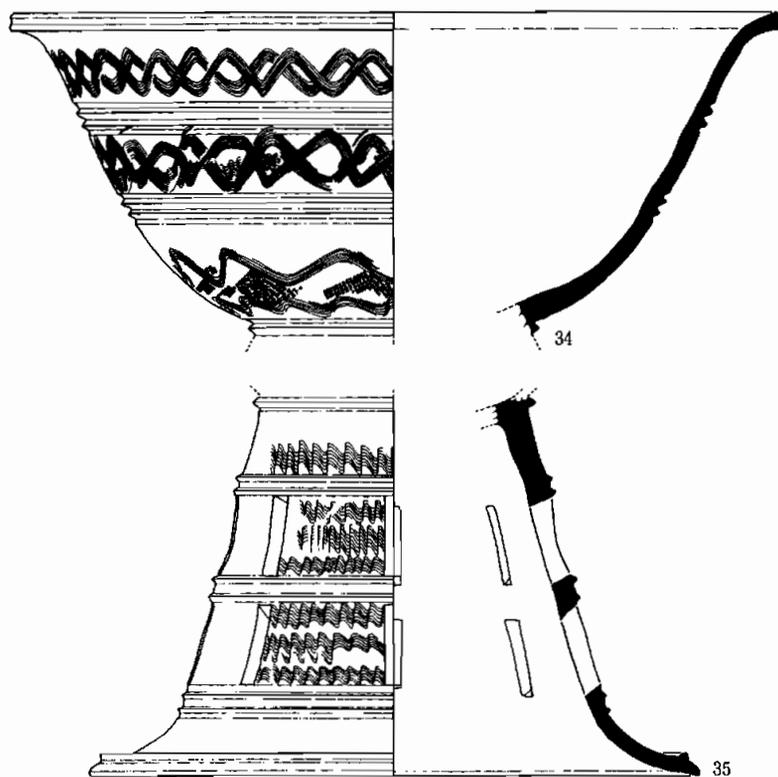
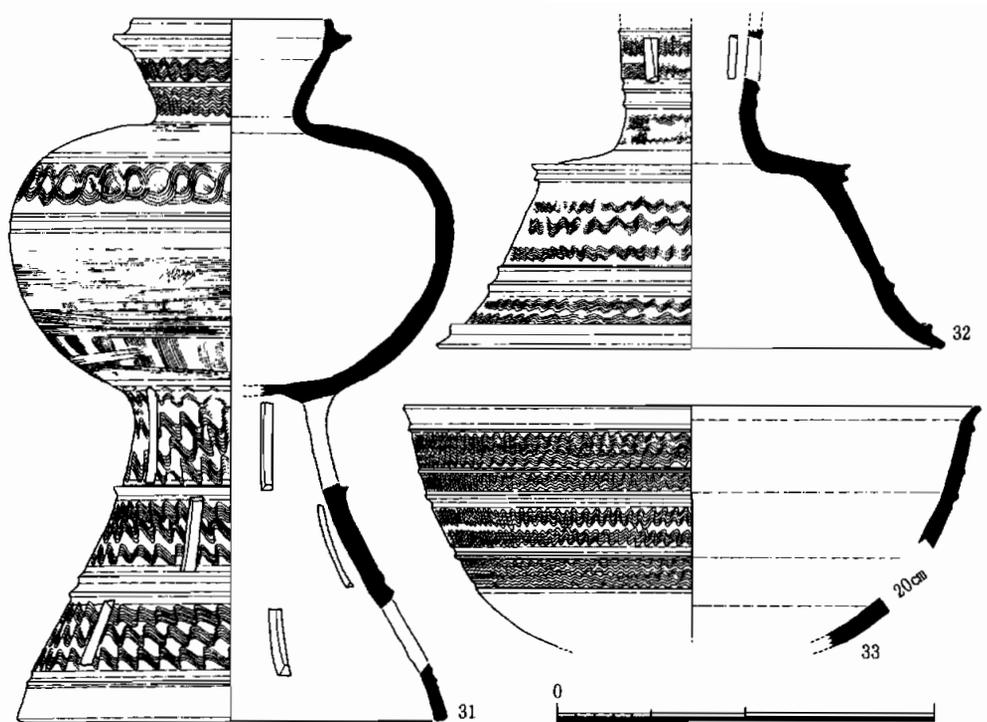
TK七三号窯跡とTK八五・TK八七号窯跡の資料を比較・検討した場合、大きな変化は見られない。大きな変化が見られない点は、それが一つの型式として認定できる根拠である。しかし、細部において多少の違いがある。

蓋を見てみよう。TK七三号窯跡の蓋は天井部が平坦化する。TK八五号窯跡においても同様であるが、六四は天井部が丸みをもつ。しかし、稜は突出することなくやや張り出している。その他、全体的に蓋は平坦化する傾向にある。

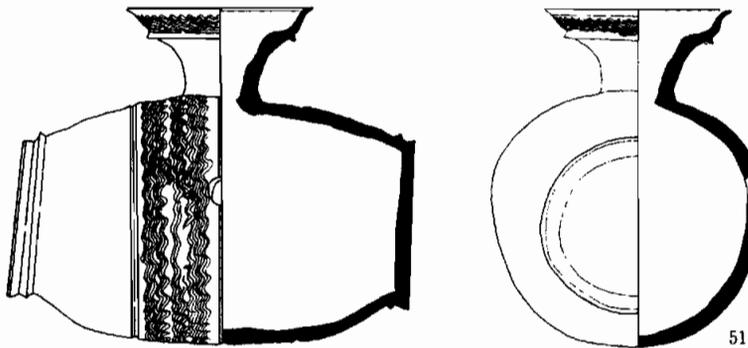
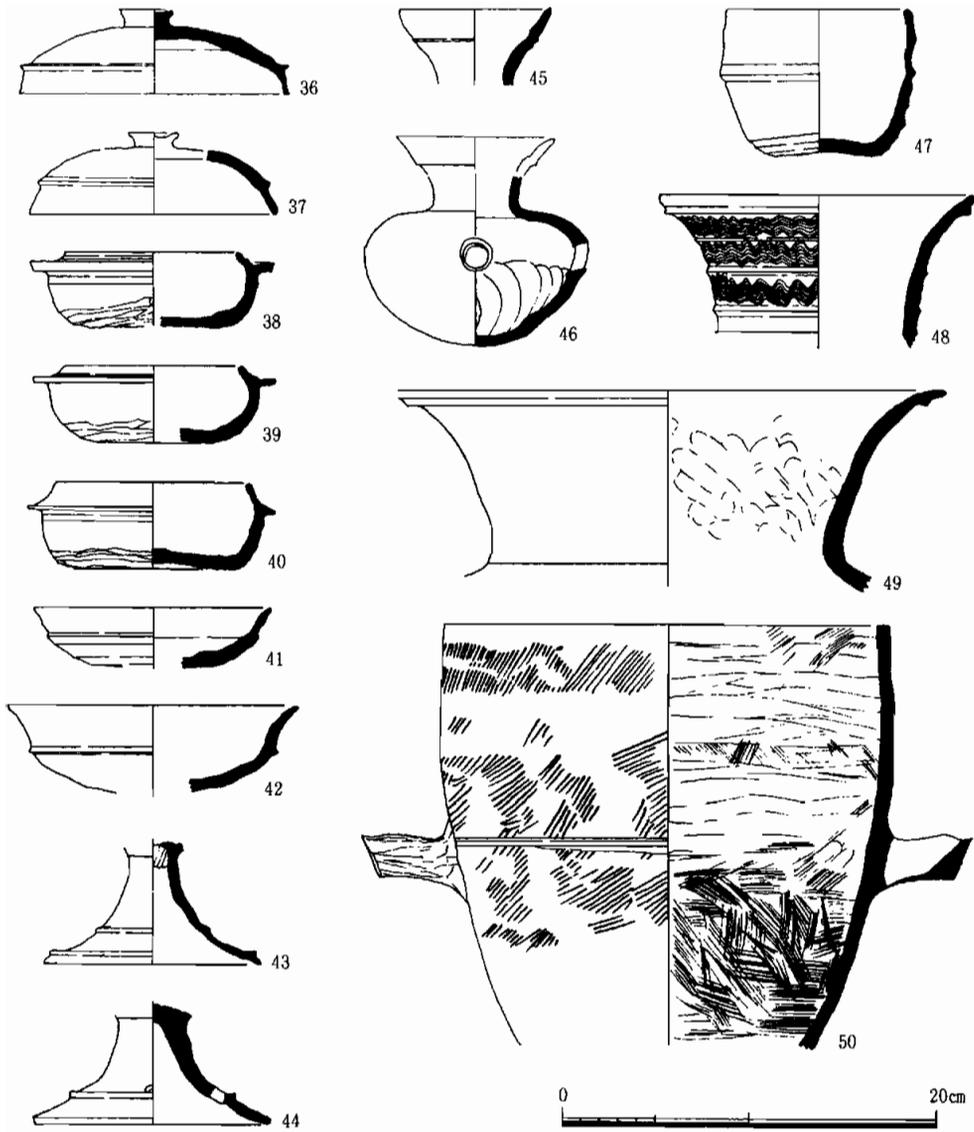
杯は、深めな傾向を残すといえども、TK八五号窯跡では浅めなものも多い。これもTK七三号窯跡と類似するが、浅めな杯はTK七三号窯跡と比較して非常に均整のとれた形を呈する(六六)。この点は大庭寺遺跡の精巧な高杯に比定できるとする見解もあるが、基本的に受け部を単純に作り、直線的な立ち上がりの状況はTK二二六型式に近くなる点が指摘できる。

高杯の脚部については、決定的な根拠は薄いですが、相対的に大きく開く脚部が増加する傾向が認められる。

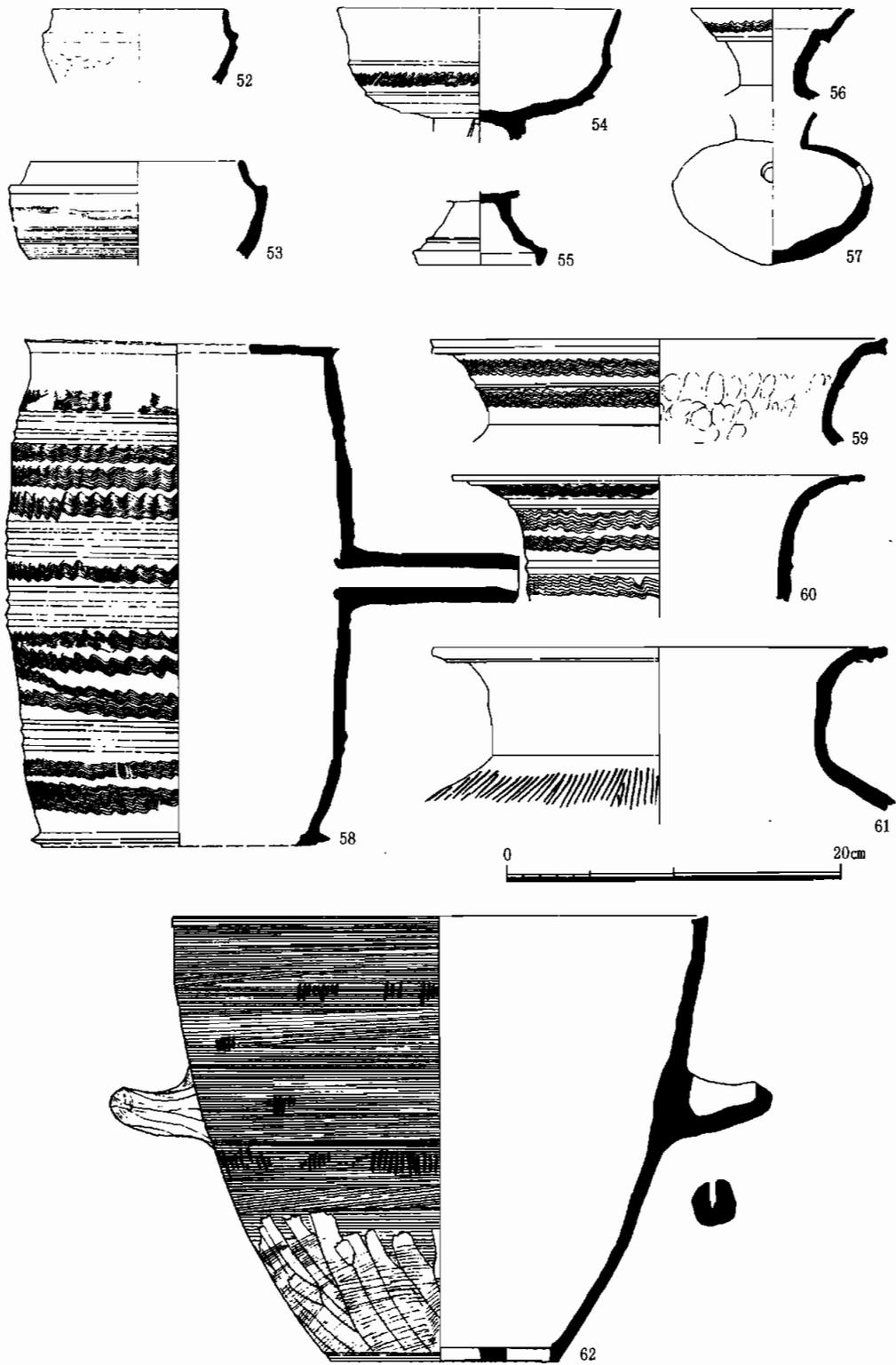
甕については、大きな違いがある。TK七三号窯跡では、口縁端部を丸く納めてその直下に突帯を巡らす。基本的な形態は変わらないが、TK八五・TK八七号窯跡では、丸く納めるものも存在するが、口縁



第3図 ON231号窯跡の須恵器3（註6文献より）



第4図 TK73号窯跡の須恵器（註7文献より）



第5図 TK87号窯跡の須恵器（註7文献より）

端部に若干の面をもたせるものが多くなり、端部の仕上げに多少の違いが出てくる。端部に面を作る思考は、TK二一六型式になると顯著に現れ、後の形態に続く傾向を読み取れる。

以上指摘したことは、相対的な中において微小ながら窺える現象である。型式設定においては、こうした微小部は最大公約数の中で捉えられるものであるが、細部においては当然のことながら、新旧の要素を保持した傾向を示し、TK七三号窯跡の後にTK八五号窯跡とTK八七号窯跡がほぼ同時に存在したことが解る。

以上指摘した要素を、ON二三一号窯跡の資料と比較すると明瞭である。蓋を見よう。ON二三一号窯跡においても天井部の突出しないもが含まれるが、三ほどのものはTK八五号窯跡にはない。同様に杯の形態を見ると、深形に仕上げて受け部の食い込んだ形態はON二三一号窯跡の特徴であるが、これがTK七三号窯跡では浅形のものが多くなり、受け部の形態は引き継ぐ。しかしTK八五号窯跡では、TK七三号窯跡の形態とよく似ているが、前述のように受け部の作り方が異なり、回転篋削りを一部で採用している。

高杯の脚部についても看取できる。TK七三号窯跡とTK八五・TK八七号窯跡では、決定的な違いは示唆できなかったが、ON二三一号窯跡では中実のもの、脚部のよく締まるものが多く、TK八五・TK八七号窯跡と比較すると歴然に違いがある。

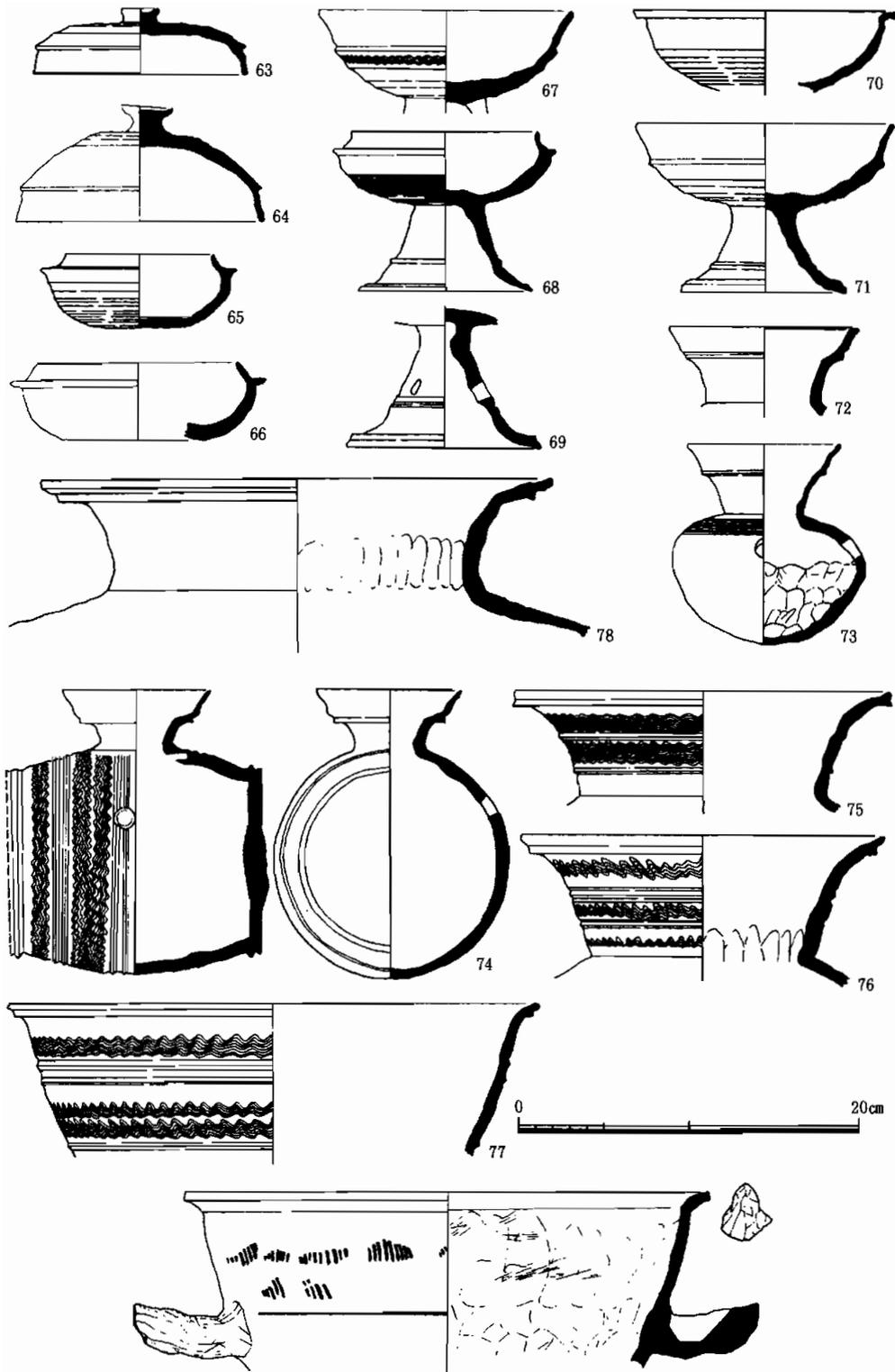
甕では、TK八五・TK八七号窯跡の資料の口縁端部は、比較的面をもたせるが、TK七三・ON二三一号窯跡では丸く仕上げるものが多く、古相を呈する傾向がある。

このような視点において、ON二三一・TK七三・TK八五・TK八七号窯跡は相対的にTK七三型式として総称できる内容をもち、型式設定を再認識できる。しかし、前述の各窯跡は微小な違いによって、ON二三一↓TK七三↓TK八五・TK八七への変化の認識の理解が可能であることも事実である。この微小な差を拡大・誇張する必要はないが、相対的な変化の流れを理解することによって、こうした型式の設定が可能になるのであり、次に述べるON二三一号窯跡と大庭寺遺跡の資料との比較・解釈において重要なポイントを握っている。

三、TK七三型式とTG二三一・二二三号窯跡

TK七三型式は、TK七三号窯跡の資料を代表させた最古の須恵器の一群と理解できることは前述した。その中で、ON二三一号窯跡は古相を呈し、TK八五・TK八七号窯跡は新相を呈する内容をもっていった。ここではこうした成果を基にして、近年話題を集めている大庭寺遺跡内のTG二三一・二二三号窯跡をとり上げ、ON二三一号窯跡との比較して相対的な前後関係について考えてみたい。

まず、蓋についてみてみよう。TG二三一・二二三号窯跡の蓋は、



第6図 TK85号窯跡の須恵器(註7文献より)

天井部に丸みをもたせ、稜部は外方に強く引き出す。つまりは扁平なものとなり、天井部には凹線と刺突文を巡らすのが通有である(七九・八〇)。一方、ON二二二号窯跡では全体的に扁平な形態をとるようになるものの、約六割に天井部の文様をもつ。TK七三号窯跡以降では、稜があまり無文が大半を占めるようになることから、ON二二二号窯跡はTG二二二・二二三号窯跡の影響を大きく受けて成立したことが窺えよう。

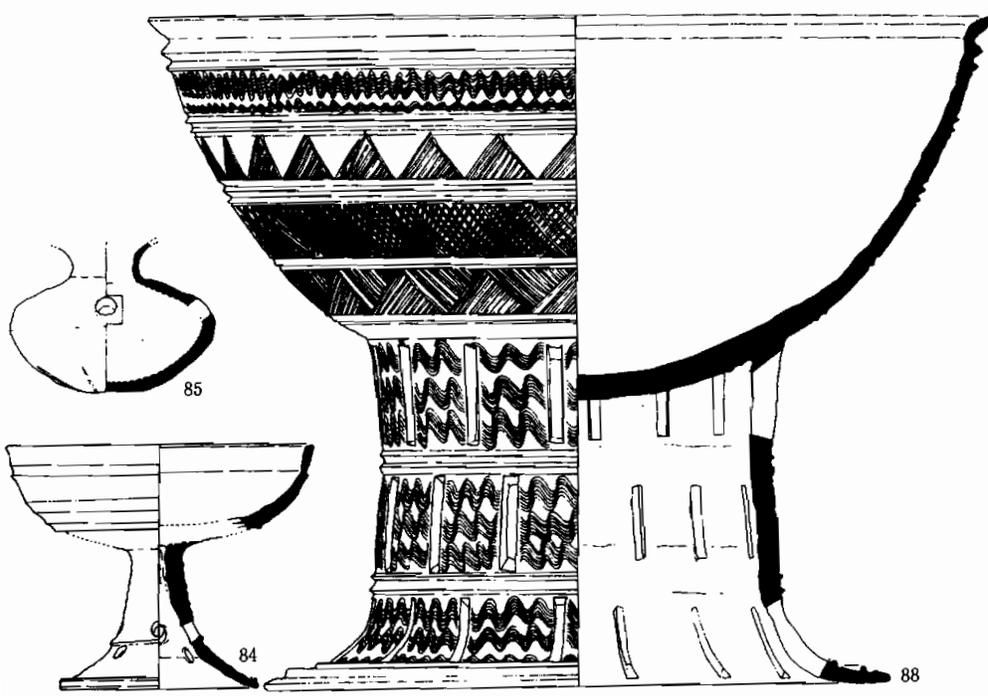
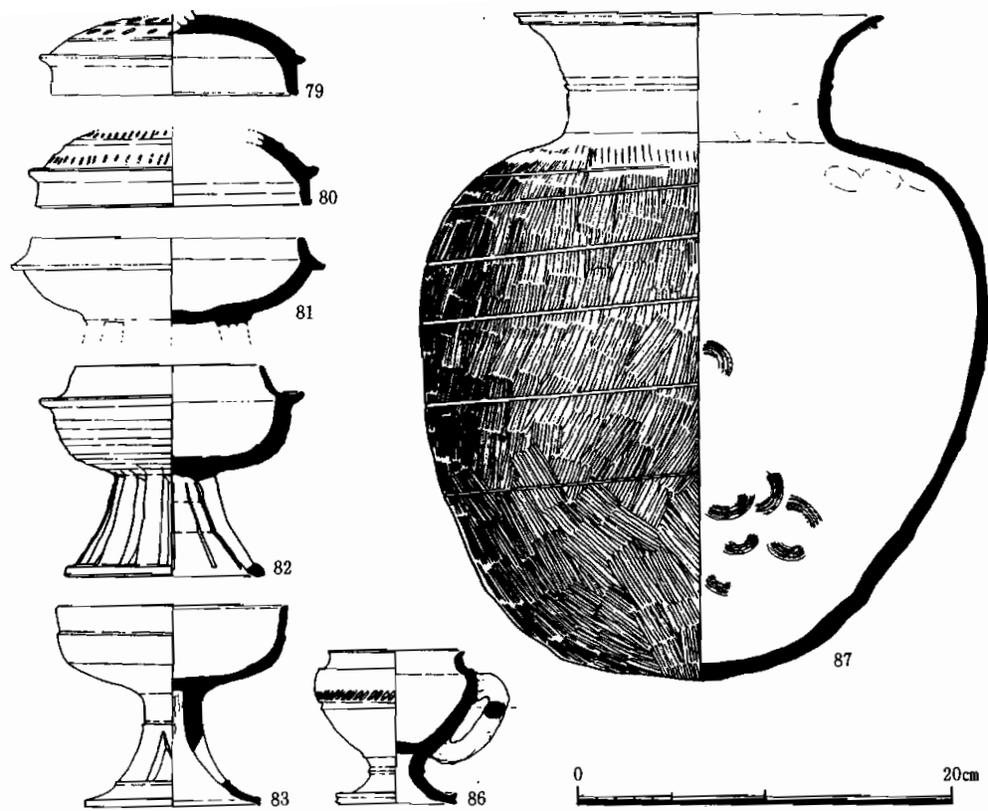
杯は、TG二二二号窯跡で一点確認されているものの、普遍的ではない。形態的にも箱形の稚拙なものであり、高杯に見られる精巧さはない点から、主要な生産品ではないことが解る。ON二二二号窯跡では、杯を認めるようになる。形態的にはTG二二二・二二三号窯跡の高杯の手法と通じる。受け部を必要以上に平坦化させる点である。これはTK七三号窯跡でも看取されるが、その後は希薄になる。

高杯は多種存在する。碗形に近い形態で屈曲を有する杯部に、柱状に近い脚部を付ける高杯はTK七三型式まで存続するが、多孔透しのもものはそれ以降たどれない。ON二二二号窯跡では、多孔透しに近い幅の広い透かしを有する脚部が存在する。柱状に近い脚部は、杯部との接合部が中実になるものや、よく締まったものがTG二二二・二二三号窯跡では顕著であるが、この傾向はON二二二号窯跡でも認められる(二二二・二二四)のに対して、TK七三号窯跡以降では幅の広い形状のものが増える(六八・七一)。

TG二二二・二二三号窯跡の器台も多様であるが(八八)、高杯形器台は基本的に箱形に近い深い杯部をもち、口縁部を外反させるものと、丸目の体部をもち口縁部をさほど外反させない二者に分かれる。この二者はON二二二号窯跡でも認められる(三三・三四)のに対して、TK八五号窯跡以降では両者を折衷した形態になる(七七)。

文様においてはさらに顕著である。TG二二二・二二三号窯跡では、器台の表面を飾る文様に、波状文・篋描き文(鋸齒文・格子目文)・組紐文・集線文・列点文等がある。特に、篋描き文・組紐文・集線文は最古の段階を象徴する文様といえる。これが、ON二二二号窯跡では、波状文・列点文は別にして、篋描き文はなくなり、非常に雑な組紐文と集線文がわずかに施されている(三二)。特に組紐文はその構成と手法のモデルが無いと施しようがないと理解できる。この点からして、TG二二二・二二三号窯跡のようなモデルの存在が不可欠になる。さらに、ON二二二号窯跡で重要なことは、組紐文を模倣した文様が存在することである。三四は、波状文を二重に巡らせ、組紐文風に描く。こうした例が当窯では数点存在する。これは、組紐文を描く意志をもちながら、モデルの喪失か省略した結果と判断でき、TG二二二・二二三号窯跡の後の段階に位置付けるのに有力な根拠になる。TK七三型式以降では、こうした文様が施されなくとも時期的な流れとして判断できるのである。

甕の外面に残る叩き目文では、第一表のように大庭寺遺跡では、平



第7図 大庭寺遺跡(393OL)の須恵器(註2文献より)

第1表 襷片に見る叩き目模様 (註7文献に一部加筆。()は比率)

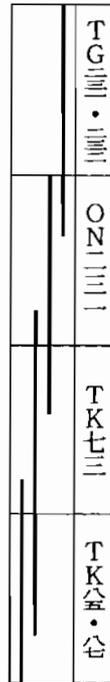
	TG231・232	ON321	TK73	TK85	TK87
平行叩き	○	(14.3)	7033(97.6)	5110(84.9)	2364(93.8)
細かい平行叩き	○	(14.8)	156(2.2)	391(6.5)	37(14.7)
斜格子叩	○	(18.7)	0	278(4.6)	74(29)
格子叩き	○	(19.0)	17(0.2)	222(3.7)	45(18)
縄席文叩	○	0	0	20(0.3)	1(0.03)
資料数		(100)	7206(100)	6021(100)	2521(100)

行・格子・縄席の各文様がそろい、ON二三一・TK七三号窯跡では縄席文が欠け、再びTK八五・TK八七号窯跡において少量の縄席文が加わるデータが出ている。時代が新しくなることに縄席文が減少することが予想できるが、多少違っている。大庭寺遺跡と比較して縄席文が減少する点は大勢において認められる現象であることを重視すれば、縄席文の存在のみが大きなポイントではないと判断しておきたい。襷の外面に施されるナデについて見てみよう。襷の外面には、叩き目文を残すもの、内面と同様に丁寧にすり消すものがある。TG

二三一・二二三号窯跡では、比較的顕著に見られるのに対して、ON二三一号窯跡では多少稀少になるものの大甕において顕著に認められるのが、それ以降はほとんど見られなくなり、時代的な流れの中で判断できよう。尚、大甕に見られた底部の成形技法である絞り目技法は、ON二三一号窯跡以降には見られなくなる。その他、微細な現象は多くあるが、以上のように大庭寺遺跡、TG二三一・二二三号窯跡からON二二三号窯跡への流れと変遷が明確に追えることが解る。

おわりに

以上のように、最古の須恵器段階は、大庭寺遺跡のTG二三一・二二三号窯跡からON二二三号窯跡、そしてTK七三号窯跡からTK八五・TK八七号窯跡へと変遷していくことが理解できた。以上のような流れを模式的に示すと次のようになる。



それぞれの窯の操業期間は、機械的測ることはできないが、ON二二三号窯跡からTK七三号窯跡、さらにTK八五・TK八七号窯跡にかけては、土器の形態や技法の点から見て、非常に短い期間であったと判断される。逆に、TG二三一・二二三号窯跡からON二三一号窯跡にかけては、文様の変化が著しいことから考えても、前者に比べて多少の時間幅を考慮しなくてはならない。

このような方向性は、すでにON二三一号窯跡の報告者である西口陽一氏が述べており、TK七三号窯跡とTK八五号窯跡の新旧については、一瀬和夫氏の詳細な検討があり、基本的には賛同する。また、全体的な見通しは早くから大庭寺遺跡の調査成果を検討した岡戸哲紀が指摘している^⑩。筆者はこうした先学の見解を踏襲して、よりその内

容の位置付けと全体像の把握を試みた。こうした窯跡の違いを系譜の違いとして考える人もいるが、以上のように合理的にその変遷を追うことができるのである。

ON二二一号窯跡からTK八五・TK八七号窯跡の須恵器が短期間であるという予想は、この三者を切り離して単独の型式として認識するのではなく、これまでの成果にもとづいてTK七三型式の範疇で理解する必要があろう。形態・技法・文様において多少異なる内容を備えるといえども、それは許容できる内容といえよう。

逆に、TG二二一・二二三号窯跡の資料は、渡来して間もない時期の、朝鮮半島に直接的に連なる内容を備えており、新たにTG二二一またはTG二二三型式として設定できる要素を備えると考ええる。この点からすれば、TK七三型式はこの後に日本化が進んだ型式であるとすることができ、混沌とした状況の中で急激に日本化に向かっていったことが窺える。

しかし、こうした中においても、純粹の日本化とは言えない。ON二二一号窯跡から新たに出現する須恵器が存在すること、窯跡においても軟質系土器を伴うこと、さらには小阪遺跡のように、新段階においても在来・渡来の多様な遺物を多量に出土する状況は、日本化に向かう段階においても随時渡来人の渡来や、朝鮮半島からの影響があったと理解しなくてはならない。

註

- (1) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 一九六六年。
- (2) 大庭寺遺跡は一九八六年に調査が開始し、調査区を西に拡張する従い古段階の須恵器の量が増し、西端部で窯跡の灰原を検出した。その成果の一部は、『陶邑・大庭寺遺跡』I・III(財団法人大阪府文化財協会 一九八九～一九九三年)として刊行されている。
- (3) 岡戸哲紀「陶邑と大庭寺遺跡」(『第三回埋蔵文化財研究集会 古墳時代における朝鮮系文物の伝播』埋蔵文化財研究会関西世話人会)一九九三年。
- (4) 一瀬和夫「古墳出土の埴輪と初期須恵器」(『小阪遺跡』近畿自動車道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター)一九九三年。
- (5) TK七三号窯跡とTK八五号窯跡の新旧については、一瀬和夫氏が述べている。前掲註(4)。
- (6) 西口陽一『野々井西遺跡・ON二二一号窯跡』近畿自動車道松原さみ線建設に伴う発掘調査報告書I(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第八六輯 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会)一九九四年。
- (7) 中村浩他『陶邑』III(『大阪府文化財調査報告書』第三〇輯 大阪府教育委員会)一九七八年。
- (8) 西口陽一前掲註(6)。

(9) 一瀬和夫前掲註(4)。

(10) 岡戸哲紀前掲註(3)。

尚、小稿の一部は、文部省平成六年度科学研究費補助金(一般研究C)の
成果を含んでいる。